



Data 2023-6

監督・脚本: チャン・リュル (張律)
 出演: ニー・ニー (倪妮) / チャン・ルーイー (張魯一) / シン・パイチン (辛柏青) / 池松壮亮 / 中野良子 / 新音

👁️👁️ みどころ

私は、『キムチを売る女』(05年)しか知らなかったが、中国朝鮮族3世のチャン・リュル(張律)監督の活躍は、その後も続いているらしい。

福岡の柳川が“日本のペニス”と呼ばれていることは私も知っていたが、なぜ彼はそんな柳川を舞台に、またそれをタイトルに、本作を作ったの?それは、『漫長的告白』という原題を考えれば、よくわかる。

北京に住む、性格が正反対の兄弟が、なぜ同じ女性リウ・チュアンを愛したの?彼女は、なぜ突然姿を消したの?なぜ今、柳川に住んでいるの?

韓国のホン・サンス監督の会話劇も面白いが、本作のさまざまな会話劇も面白い。しかして、末期癌の告知から始まる、本作の“長い告白”とは?その内容と味わいは、あなた自身の目でしっかりと!



■監督は張律、主演女優は倪妮。こりゃ必見!■

『柳川』と題された本作のチラシを見ても私には、本作が中国映画だとわからなかった。しかし、本作はれっきとした中国映画だ。そして、本作の監督・脚本が『キムチを売る女』(05年)『シネマ17』455頁)で私に強烈な印象を残した中国朝鮮族3世の張律(チャン・リュル)監督だと知り、さらに、本作の主演女優が張藝謀(チャン・イーモウ)監督の『金陵十三釵』(11年)『シネマ34』132頁)で強烈な印象を残した、倪妮(ニー・ニー)であることを知ると、こりゃ必見!

さらに、ビックリしたのは、本作に若手を代表する俳優、池松壮亮と、『君よ憤怒の河を流れ』(76年)『シネマ18』100頁)で、中国でも有名な女優、中野良子が出演していることだ。なぜ中国映画にこんな日中のスターが共演しているの?しかもそのタイトルが『柳川』(やながわ)なの?

■□■日本の柳川（やながわ）＝汉语の柳川（リウチュアン）■□■

本作の舞台は、日本のベニスと呼ばれる福岡の柳川。これは、日本語で読めば“やながわ”だが、中国語では“リウチュアン”だ。

本作の冒頭、中年になり、自分が不治の病であることを知ったドン（チャン・ルーイー／張魯一）は、長年疎遠になっていた兄チュン（シン・バイチン／辛柏青）を、日本の柳川の旅に誘う。それは、柳川が、北京語では“リウチュアン”と読み、2人が青春時代に愛した女性リウ・チュアン（ニー・ニー／倪妮）と同じだったから……。そんなくだらない（？）ゴロ合わせから始まる物語は一見バカバカしいようだが、何の何の！そんなストーリーは、かなり面白そう！

■□■兄の恋人チュアンはなぜ消えたの？なぜ柳川に？■□■

本作の冒頭の舞台是北京。ゼロコロナ政策が急転換した今、北京でも爆発的に感染が広がっているから、今は北京の病院が日本のニュース番組に登場するケースも多い。しかし、今、北京の病院から出てきた弟のドンの表情は隠鬱そのものだが、そんな彼の口から語られる言葉とは……？

続いて登場してくるのは、ドンと兄チュンとの対話劇。2人で店のカウンター席に隣り合わせで座る中で、ドンがチュンに対して、決して饒舌ではないが、はっきり一緒に日本の柳川に行こうと誘っていることは明らかだ。しかし、なぜ末期癌の告知を受けたばかりのドンが、約20年前に兄の恋人だったリウ・チュアンが住んでいるという福岡県の柳川を訪れようという気になったの？このドンとチュンの兄弟は、陽のチュンに対して、陰のドンと、性格が正反対だということがよくわかる。2人の会話を聞いていると、かつて北京に住んでいたチュアンはチュンの恋人としてそれなりにうまくいっていたようだが、なぜかある日、何も告げないまま姿を消してしまっただろう。それは一体なぜ？そして、彼女はなぜ日本の柳川に住んでいるの？さらになぜドンはそれを知っているの？そして何よりも、今なぜドンはチュンとともにチュアンが住んでいる柳川に行こうとしているの？

■□■風景に注目！宿にも注目！宿には第三の男も？■□■

大阪の道頓堀を訪れる中国人の観光ツアーは、買い物目当てのド派手な“ご一行様”が多い。しかし、本作に見る中年男2人の柳川訪問は、それとは正反対の静かなものだ。宿はドンが手配したらしいが、それは独身男の中山大樹（池松壮亮）が自宅の一部を宿（民宿？）として使っている珍しいものだ。ドンはどうやってこんな宿を見つけたの？

それはともかく、本作ではまず暖かい“こたつ舟”による“柳川の川下り”の風情をドン、チュン兄弟とともにしっかり味わいたい。愛媛県の松山市で生まれ育った私は、道後温泉をはじめとする故郷の観光名所をよく知っているが、約1時間かけて船頭さんが案内してくれる柳川の川下りも一度は行ってみたいものだ。北京育ちのチュンが喜んだのは当然だろう。

そんな観光を終えた後の2人のお目当てはもちろん、リウ・チュアンが歌っているとい

うバーの訪問。遠くの席に座ってチュアンが歌う姿を見ながら「俺たちのことに気づくかな？」と話していると、歌い終えたチュアンが、まっすぐ2人の席に向かって来たからすごい。さあ、そこから3人の間でどんな会話が・・・？

本作では、そこから場所やシチュエーションを様々に変えながら展開していく2人ないし3人の会話劇が最大のポイント(面白さ)だが、宿に帰ってみると、チュアンも中山の宿(家?)に住んでいるらしいから、アレレ。こりゃ、一体どうなってるの?チャンの見立てでは、中山もチュアンに気がありそうということだが、その真偽は?チャン・リュル監督の映画の特徴はパンフに詳しく解説されているが、本作を見れば、節度を持った会話劇の巧妙さにあることがよくわかる。“会話劇”ばかりで26作も作り続けている韓国の本・サンス監督作品の会話劇も面白いが、本作ではチュアンを巡る“第三の男”として登場する中山を含めた3人の男たちと、チュアンとの間で展開される様々な会話劇を存分に味わいたい。

■□■チュアンの魅力は?お気軽な女?魔性の女?いやいや■□■

私が高校時代にたくさん見てきた女優・吉永小百合の魅力は、清純さ。『泥だらけの純情』(63年)では、それが際立っていた。それに対して、吉永より後輩のくせにやけに演技がうまかったのが和泉雅子。他方、浅丘ルリ子や芦川いづみは、やはり石原裕次郎との共演が最も似合っていた。そんな日活の女優陣に比べると、岩下志麻等の松竹の女優陣はまったく異質だったし、今なお活躍している女優、加賀まりこはまさに“魔性の女”がピッタリだった。

しかして、若い頃チュンの恋人だった(?)チュアンは、なぜ一言も言わずに北京から姿を消してしまい、どこへ行ったの?それは、夫の浮気に反発したチュアンの母親がロンドンに移住したためだが、チュアンはなぜそれを、ドンやチュンに説明しなかったの?チュンはドンに対して、今でもチュアンのことを“お気軽な女”と称していたし、柳川でも密かにチュアンの部屋に入っていた(?)から、Hな関係などこれっぽっちも考えられないドンに対して、北京に妻子のいるチュンの方は今でもチュアンとHな関係を続け、お気軽な女と見ているの?

他方、こちらも独身を保っているとはばかり思っていた中山には、チュアンとの会話の中で、意外にも15歳になる娘がいることが語られるからビックリ!しかして、本作では、なぜか、たった1人で中山の宿(家?)の近くをうろつく中山の娘(新音)の姿と、ある偶然によって彼女に寄り添う形になるチュアンの姿が登場するので、それにも注目!もともと、中山とその娘の間の会話劇は一切登場しないので、現時点での2人の確執や思いは、観客が1人1人想像するしかない。しかし、それをうまくチュアンが橋渡ししてくれる(?)ので、チャン・リュル監督による、その構成の妙にも注目したい。

さあ、そんな風に3人の男たちだけでなく、中山の娘にも影響を与える女、チュアンの魅力は如何に?この女は、お気軽な女?魔性の女?それとも・・・?

■□■女優・中野良子の魅力と存在感をじっくりと！■□■

1945年3月生まれの吉永小百合は“戦中派”だが、1949年1月生まれの私は“戦後派”。それと同じように、1950年5月生まれの中野良子も“戦後派”だ。1972年4月に司法修習生となり、1974年4月に弁護士登録をした私は、忙しい毎日を送っていたが、それでも中野良子が島田陽子らと共演したTVドラマ『光る海』（72年）は、石坂洋次郎の人気小説が原作だったことと、美人女優がたくさん出ていたから、よく観ていた。しかし、中国で大ヒットし、日本の美人女優、中野良子の名を中国全土に知らしめた、『君よ憤怒の河を渉れ』（79年）は、私が独立した年に公開されたこともあって、観ていない。後になって何度かTV放映で観たが、東京の街中を彼女が馬に乗って失踪するシークエンスは何とも奇想天外な魅力がいっぱいで、その美女ぶりも際立っていた。

そんな絶世の美女も今や70歳を超えている。オードリー・ヘップバーンのことを思い起こすと、若い頃に絶世の美女だった女性は、老人になると見られなくなってしまう恐れもあるが、中野涼子はそうではない。居酒屋の女将役として、好きなように働いている彼女の姿は今なお魅力がいっぱいだ。もちろん、本作における彼女はあくまで脇役だから、ドンとチュンが語り合うシーンに、カウンターの向こう側に立って、時々言葉を挟むだけ。しかし、彼女は本作におけるそんな自分の役柄をしっかりこなしている上、中山から1人娘についての“悩み相談”を聞いてやるシークエンスでは、自分の生きてきた道を振り返りながら、味わい深い人生訓を垂れてくれるので、それにも注目。

チャン・リュル監督が本作に女優、中野良子を起用したのは、一方ではもちろん中国人受けを狙ったものだろうが、他方で彼女のしっかりした演技力を信頼、期待してのものだということ、彼女の演技を見ながらしっかり確認したい。

■□■ドンは何のために柳川へ？癌の告白は？最後の舞台は？■□■

2人だけの男の兄弟の関係は微妙なもの。徳川家の3代目を巡っては、2代将軍・秀忠の死後、秀忠の長男・家光と、次男・駿河大納言忠長の間で大変な争いが勃発したことは、映画『柳生一族の陰謀』（78年）を見ればよくわかる。兄と2人兄弟である自分自身を振り返っても、その微妙さがよくわかるから、本作におけるチュンとドン兄弟の微妙な関係は非常に興味深い。

本作はドンに対する末期癌の告知から始まり、兄のチュンを誘って柳川旅行に赴き、チュアンとの再会の中でさまざまなドラマが展開されるから、私はどの時点でドンの癌告白が始まるのかをずっと注視していた。ところが、本作はそんな私の期待(?)を完全に裏切ってくれるから面白い。しかし、それなら、ドンは一体何のためにチュンを誘って柳川への旅に出かけたの？自分が末期癌に罹患したことを告白するには絶好の兄弟旅行であり、チュアンとの再会旅行であることは明白だが、なぜドンは柳川旅行中にそれを告白しなかったの。

しかして、スクリーン上の最後の舞台は、ドンが末期癌を告白したのか、しなかったの

かを教えてくれないまま、1年後の北京になっていくので、それに注目。ちなみに本作の邦題は『柳川』だが、原題の『漫长的告白』は“長い告白”だということが日本人でも理解できるが、長い告白の中に末期癌の告白は含まれていたの？それとも含まれていなかったの？ラストのシークエンスには、ドンは一切登場しないが、それはもちろんドンが既にこの世を去っているからだ。そんなドン亡き後の北京で、チュンとチュアンはどんな会話劇を繰り広げながら本作の結末に向かうの？原題を『漫长的告白』とした本作の結末は、あなた自身の目でしっかりと。

2023（令和5）年1月18日記